

入、少し火をほそめて焚、蓋をとるべからず、少しかたき位を度として薪を引、爐かきも引盡し、かきま
せ、しばらくむして、釜よりもり食すべし、粟は米と當分ならば喰よきもの也、米壹升七八合の飯
を食とする所へ、米五合に粟五合のかゆをかたく焚て食するにむかふべし、ざぶく、水氣のな
きやう堅く焚べし、

〔酒食論〕飯室律師好飯申様

前後もしらすゑひばれて、命をうしなふ事も有、あまりゑひたるときはまた、足手もさらになえ
はて、わづかにいきはかよへども、人の正體さらになし、したしきうときあつまりて、水茶あは
がゆ。みやうがのね、つぎしぼりつ、のませよと、あはてさはぐもあさましや、

蕎麥粥

〔天上臈御名之事〕女房ことば

一そばのかゆ うすゝみ

蔬粥

〔類聚名物考 飲食一〕蔬粥

陸游詩 自愛雲堂無粥香 自注、僧雜菜餌之屬作粥名蔬粥、無方久切、玉篇火熟也、

大根粥

〔日用 助食 竈の賑ひ〕大根粥

大根がゆは、右白かゆの米を洗ふごとく、ざつと洗ひ、水を多く入焚て、吹あがらんとする時、右め
しに入たるごとく、さざみたる大根を入、鹽をすこし入、右白粥の火かげんに焚あげ、暫くむし置
て、醬油のかけ汁にて食すべし、至て美味なり、

薯蕷粥

〔倭名類聚抄 十六 漿〕薯蕷粥 崔禹錫食經云、千歲藥汁、狀如薄蜜甘美、以薯蕷爲粉、和汁作粥、食之補五

藏、薯蕷粥、和名
以毛加由、

〔伊呂波字類抄 飲食〕薯蕷粥 イモカユ

〔易林本節用集 伊衣食〕薯蕷粥 イモカユ